

ボダンにおける主意主義

——妖術師撲滅論と国家論の基盤として——

菊地 英里香

はじめに

16世紀フランスを代表する知識人であるジャン・ボダン（1529/30-1596年）は、主著『国家論』（1576年）において近代的主権概念を確立したことで名高い¹⁾。あらゆる学問分野に通じていた彼は、妖術師（魔女）狩りを推進するために『妖術師の悪魔的狂気』（1580年）という悪魔学の著作を残してもいる²⁾。ボダンの思想や哲学は、宗教戦争や疫病や天災に一気に見舞われた16世紀のフランスという状況を抜きにしてはとうてい理解できない。当時のフランスは、まさに自由意志により悪を選択したとボダンが目していた者たち——私利私欲に走る王侯貴族、妖術師など——により混乱していた。

ボダンは『歴史方法論』（1566年）において、「意志は人間の諸行為の主人であり、それはある対象を避けたり求めたりするために、理性あるいは魂の下位の能力を志向する」³⁾と述べている。ボダンによれば、人間の

1) ボダンの政治学について最近書かれたものとしては以下がある。川出良枝「ボダン——主権論と政体論」, 川出良枝責任編集『主権と自由（岩波講座 政治哲学 第一巻）』所収, 岩波書店, 2014年, pp.97-122.

2) ボダンの悪魔学と国家論の概要に関しては、以下を参照されたい。拙稿「ジャン・ボダンと悪魔学——自然と超自然のはざままで」, 『欧米文化研究』第20号, 欧米文化研究会編, 2005年, pp.23-41. 拙稿「ジャン・ボダンにおける家と国家——『国家論』から『悪魔的狂気』へ——」, 『中世思想研究』第49号, 2007年, pp.129-143. 本稿ではボダンの国家論および悪魔学に晩年の倫理学の著作である『パラドクス』（1596年）における議論を加味することにより、ボダンの哲学の一端を明らかにする。『パラドクス』は息子と父の対話形式による子供の教育に資する著作である。概して息子はアリストテレスの見解を代弁し、父がこれに反駁を加えている。

3) Jean Bodin, *Methodus ad facilem historiam cognitionem*, Paris 1566. *La méthode de l'histoire*, trad. par P. Mesnard, Paris, 1951 (*Œuvre philosophique de Jean Bodin*, t. 1, pp. 271-473), p. 119. 本書では、歴史の批判的方法論が示されると共に、諸学（人間にかかわる学、自然に関わる学、神に関わる学）が一大体系をなすとするボダンの考え方が示されて

自由意志は善への方向づけをもたないために悪を選択することもできる。激化する内乱と妖術師たちの存在は人間の悪しき側面を浮き彫りにし、悪を選ぶ者が大半だとボダンに悟らせたことだろう。このような人間たちをコントロールするために、長年の研究と熟考をもとに記されたのが『国家論』であった。

本稿では、まず善悪どちらをも選べる立場にあるにもかかわらず、人間の大半が悪を選ぶとボダンが想定していることを確認する。そしてボダンの主義主義に関して分析をおこない、彼の妖術師撲滅論と国家論を深層からとらえ直してみたい。

1. 善と悪の岐路に立つ人間

人間は善を選ぶことも悪を選ぶこともできる存在であるとされる。この問題に先立ち、ボダンが善と悪とをどのようなものと定義しているかを見ておく。まずは善についてとりあげる。「それを享受する者にとって有益なもの」と定義される善については、ボダンは以下の4つの主要なテーマから考察している。①すべてのものにとっての最高善は何か、②人間の真の目的は何か、③人間にとって最大かつ最高の善は何か、④長く幸福な生に至るために果たすべき人間の義務は何か。

順に見ていきたい。①最高善は、「想像されうるすべての被造物にとって最も有益で必要なもの、すべての善の源泉である神」⁴⁾である。アリストテレスは『ニコマコス倫理学』の冒頭 (I, 1, 1094a) で善を「万物の希求するところ」と定義し、善を目的と同一視した。中世およびルネサンスのキリスト教の知識人たちは、神のみが最高善の定義に当てはまるものであり、人間は死後に不滅の魂による神の享受の中においてしか到達できないものと考えていた⁵⁾。ボダンもこの考えを共有しており、神をすべての

いる。本書の概要については以下の論文が詳しい。栗原福也「ジャン・ボダンの『歴史の方法』」、『一橋論叢』30巻5号、1953年、pp.435-457。

4) Id., *Le paradoxe de Jean Bodin Angevin, qu'il n'y a pas une seule vertu en médiocrité, ny au milieu deux vices*, (trad. du Latin en François, augmenté en plusieurs lieux), 2012, réimpression de l'édition de 1598, (*Paradoxon, quod nec virtus ulla in mediocritate, nec summum hominis bonum in virtutis actione consistere possit*, 1596), p. 6.

5) Marie-Dominique Couzinet, «La philosophie morale de Jean Bodin», dans Gabriel-André Pérouse, Nicole Dockès-Lallement et Jean-Michel Servet (réunit par), *L'Œuvre de Jean Bodin, Actes du colloque tenu à Lyon à l'occasion du quatrième centenaire de sa mort (11-13 janvier 1996)*, Paris, 2004, p. 373.

被造物の目的であるとする。②人間の真の目的は、神の栄光に仕えることであり、③人間にとって最大かつ最高の善は長く幸せな生である。ここでは永遠の生も除外されない。④長く幸福な生に至るために人間が果たすべき第一の義務は、心を尽して神の命令に従うことだとされる。ここで言われているのは、細部にこだわる形式主義的な律法遵守ではない⁶⁾。具体的には、人々に善をほどこし、父母を敬い、しかるべき相手に友情を捧げ、各人にその所有物を帰すことであるとボダンは述べている⁷⁾。

神は不可能を命じることではなく、人間には神の命令を遂行するための能力が十分に備わっているとされる。残忍な暴君は例外として、不可能なことを命じた立法者も君主も決して存在したことがないとボダンは述べ、「私の軛は負いやすく、私の荷は軽い」(「マタイによる福音書」11:30)という聖書の言葉を引用している⁸⁾。人間が自らの意志の力のみで神の命令に従うことができると考えるボダンは、恩寵を否定さえしている。神からの特別な助けなしでも、神によって与えられた目の機能を用いれば、人は危険を見ることや察知することができる。魂が神によって与えられた徳と力そして本来の理性を用いれば、神からの特別な助けがなくとも悪を避け、善を追求することができるかとボダンは考えていた⁹⁾。

次に悪に関するボダンの見解を見ておこう。ボダンは悪を「善の欠如」だとする。悪は本質も実体ももたず、我々は欠乏という形でしかこれを知りえない。「闇とは光の欠如である」と言うのと同じである¹⁰⁾。ボダンは我々人間には計り知れない神の正義と賢慮がこの世界の中で働いていると言い、当然、悪魔(サタン)も神の栄光に役立つ存在とみなされている。したがって、破壊のために神がサタンを創ったとか、天使が躰いたから神は不正義だとみなすことは誤りであり、それは世界で一番美しい宮殿に下水やごみだめやその他の汚物の集積所があることを非難するのと同様だとボダンは言う。また、人々が悪魔のせいにしてきた死や病気を送り込むのも神だとされる。

とはいえ、悪魔の目的は人間を滅ぼすことである。そのためには、「人

6) Pierre Mesnard, «Jean Bodin et la critique de la morale d'Aristote», *Revue thomiste* n°49, 1949, p. 547.

7) Jean Bodin, *Paradoxe*, p. 40.

8) *Ibid.*, p. 33.

9) *Ibid.*, p. 36.

10) *Ibid.*, p. 4.

類を極度の過ちと無知の状態、すべての悪の極みにする」必要がある。そこで悪魔は妖術師という手下を増やしてこの策略を成就させようとする。ボダンによれば、悪魔は自らの支配を確立すべく、今ではすべての身分とすべての階層に手下たる妖術師をもっている。悪魔は神の「死刑執行人」¹¹⁾であるが、神の許しの下という制限はあるものの、かなり自由に活動していると想定されている。だが、文字通り神の死刑執行人に留まるのであれば、神が祝福して創造した人間を悪魔が破滅させることを神が許すはずなどないだろう。したがって、悪魔の下に走る者たちがいたとしても、それは少数派であり、さらなる神の善が輝くためのものとしてその存在が容認されてしかるべきではないか。だが、ボダンはそのようには考えない。そこには、妖術師が増えすぎてしまっているというボダンの判断があるからだ。すなわち彼が重んじるハーモニーのバランスが崩れているため、梃入れをする必要があるとボダンは考えたのである。

そもそも人はなぜ悪魔と結んで妖術師になるのだろうか。答えはボダンの人間観と深くかかわっている。人間が善への志向性をもつ存在であると考えの中世キリスト教神学の伝統から飛び出し、ボダンは人間の意志の中立性を認め、どの方向を選択するかは各人に任せる。悪霊は呼ばれずともやってきて人間に働きかける。人間が悪霊と結びつく場合は、呼ぶ、祈る、懇願するといった能動的行為により、様々な世俗的欲望を充たすために行動を起こすことができる。他方、天使を介して人間が神と結びつく場合は、最終的には神の決定が必要であり、人間は天使からのメッセージを受けるという受動的なありかたで神を享受する。このようにして選ばれる人間は当然ごく少数である。したがって、妖術師の数が増大しているという現状認識から、ただ祈って受動的に神からの恵みを待つ者より、己の欲望を満たすために意志の選択により悪魔と結びつく者の方が多数派だとボダンが考えたとしても不思議ではない。

2. 自由意志をめぐる

2.1 意志の首位性について

ボダンによれば人間の知的な魂は善なる天使と悪しき霊との中間に置かれており、人間が善き存在になるか悪しき存在になるかは自身の自由意志

11) Id., *De la démonomanie des sorciers*, Paris, 1979 (réimpression de l'édition de 1587), fol. 259r.

の決定による。ボダンにおける自由意志は、トマス・アクィナスにおけるような善に方向づけられたものではない。トマスによれば、意志は必然的に究極目的（至福）を目的とし、その方向づけに沿って選択の自由というものがあると統一的にとらえられている¹²⁾。人間は確かに自己選択の主体であるが、決して第一原因たりえない。認識から出発して理性は意志を満足させる最善の手段を判断するが、我々の理性は完璧ではないためいつも正しい措置を講じることができるとは限らない。このようなトマスの自由意志ではなく、ボダンの自由意志はアウグスティヌスおよびスコトゥスの伝統を継承したものとなっている¹³⁾。

アウグスティヌスによれば、意志は自由であるが、同時に道徳的義務に服す¹⁴⁾。人間は本性上神に向けられているが、神の永遠法を反映する道徳律を守ることによってのみ、その本分をまっとうすることができる。意志は最高善を選ぶことも肉体的快樂を選ぶこともできる¹⁵⁾。倫理的悪は本来目指すべき善からの離反であり、意志における「欠如」なのである。このような意志が悪に陥らず道徳的によくあるためにも、神から自由に贈られる恩寵が必要であることをアウグスティヌスは強調した¹⁶⁾。

スコトゥスは意志を①自然としての意志と②自由意志との2つに区別した¹⁷⁾。前者は自然的傾向に従うものであり、欲望だけでなく理性によっても促進される。後者は自己目的として追求される目標を自由に定めるものである。本来の意味で意志と言えるのは、後者の方である。スコトゥスの神学においては、意志の自由が重視されており、判断し決定する原動力は知性ではなく意志であるとされる。とはいえ、意志作用には必ず知的作用が先行する。意志はまったく未知の対象に関して選択することはできないからだ。スコトゥスにおいては、意志と知性が連立して意志作用を引き起こすが、そこにおいては自らを駆動できるという点で意志に優先権があっ

12) Thomas Aquinas, *Summa Theologiae*, I, q. 82, a. 1; q. 83, a. 1.

13) Mogen Chrom Jacobsen, *Jean Bodin et le dilemme de la philosophie politique moderne*, Copenhagen, 2000, pp. 60-62.

14) F・コブルストン『中世哲学史』箕輪秀二・柏木英彦訳、創文社、1970年、pp. 89-90.

15) アウグスティヌス『自由意志論』第2巻第19章第53節。（『アウグスティヌス著作集第3巻 初期哲学論集（3）』所収、泉治典訳、教文館、1989年、pp. 135-136.）

16) 同上『恩恵と自由意志』第4章第6節。（『アウグスティヌス著作集第10巻 ベラギウス派駁論集（2）』所収、金子晴勇訳、教文館、1985年、pp. 24-29.）

17) 山内志朗『存在の一義性を求めて——ドゥンス・スコトゥスと13世紀の〈知〉の革命』岩波書店、2011年、p. 69. 以下本書第2章「主意主義という問題」を参照した。

た。

知性が真か偽かを判断する一方で、意志は善悪を判断する。知性は理性が示すことを意志に強いることはできないが、逆に意志は知性に強いることができる。ボダンも考えていた¹⁸⁾。ボダンにおいてもアウグスティヌスやスコトゥスと同様に、理性は神に由来するものである。したがって、「〔……〕理性は常に正しく完全である。さもなければ、それは理性ではないのだ。だが、過ちは意志が獸的欲望のもとで行使されたときの意志に由来する」¹⁹⁾。ボダンはおそらくスコトゥスの概念を視野に入れながら意志の力を強調し、その力が理性や理解より強いとさえ記している²⁰⁾。そしてさらには、意志が知性と理性と理解を支配するという立場にまで到達する。以下は、意志が理性に従う欲求であるとしたアリストテレスに対するボダンの反論である。

意志が理性に従属するという定義が正しいかどうか。さて、意志は理性に従属するどころではなく、それ〔意志〕は知性を支配しさえする。知性の力は何が真であり偽であるかを区別するものだが、意志の力は何が善であり何が悪であるかを区別する。このように、意志の力の内にあるものが知性なのである。というのは、もし気に入らないのであれば、ある者が示した主張を理解したり受け入れたりすることを

18) ボダンはトマスと同様に l'intellect 「知性」と la raison 「理性」を広狭二つの意味で用いている。広い意味では「知性」と「理性」は共に知的な能力を意味する。厳密な意味では、「知性」は全体を把握する直観的な理性として、「理性」は推論的・過程的な理性にあてられる。トマスにおける「知性」と「理性」の関係については、山本芳久『トマス・アクィナスにおける人格の存在論』知泉書館、2013年、p.44を参照。
なお、国家を統合しその頂点に立つ君主を例えるときにボダンは l'intellect を用いる。

19) Jean Bodin, *Paradoxe*, p. 35.

20) Thomas N. Tentler, «The Meaning of Prudence in Bodin», *Traditio* XV 1959, p. 375. パレンテは、ボダンがスコトゥスから受容したのは主意主義のみだという。Margherita Isnardi Parente, «Le Volontarisme de Jean Bodin: Maimonide ou Duns Scot ?», dans Horst Denzer (éd.), *Actes du Colloque international Jean Bodin*, Munich, 1973, p. 49. ティエルフ・ガルヴァンによれば、ボダンの形而上学は本質的にスコトゥス学派のそれだと言う。スコトゥスからの引用の頻繁さに加えて、神が自分の意志で自然の秩序やこの世界の土台を覆すことができるとするボダンの論述や、天使の位置づけに関するトマスとスコトゥスの議論に関して後者の見解をボダンが選択していることが理由に挙げられている。Enrique Tierno Galvan, «Los supuestos scotistas en la teoría política de Jean Bodin», *Escritos (1950-1960)*, Madrid, 1971, pp. 87-90. ヤコブセンも魂の概念や自然法の解釈にスコトゥスの影響がみられると言い、「ドゥンス・スコトゥスはボダンが忠実でありつづけた唯一の人物」と記している (Mogen Chrom Jacobsen, *op. cit.*, p. 82)。

誰も強いられることはないからである。だからもし彼の意志がこのように妨害するなら、彼は十分に確証されたいかなるものであってもこれを信じないだろう²¹⁾。

なぜボダンはこのような主意主義の立場をとるのであろうか。この問いに答えるのは難しいとしながらも、テントラーは次のように言う。「彼〔ボダン〕が提起する一つの論点は、〈共通感覚の明白な証拠に反する〉何かを人は信ずることができないと言うことは、すべての宗教の基盤を蝕み、意志の力を無とみなすことになるということだ²²⁾。テントラーも認めることであるが、この動機がボダンの意志重視の立場の背後にあるすべてではないかもしれない。とはいえ、この指摘は大変辛辣に富んでいる。結論から言うと、妖術師の存在を証明するためにも、国家の基盤である宗教を維持するためにも、ボダンにとっては魂の主人が意志であるべきであった。なぜなら、「共通感覚」²³⁾によって証明されたことのみを受け入れる合理主義の追求は、何らかの神秘が常に伴う宗教というものへの否定を喚起しかねないからである。知性より意志を上位に置くことは、超自然的現象の存在を肯定する上での必須条件だとボダンは考えていたのではないだろうか。

2.2 主意主義の必然性——妖術師撲滅論とのかかわり

ボダンは自然の中には原因の知られていない多くの驚異があり、そのうえ人間の知性には限りがあるので、不可思議なことが世界中にあふれると述べる²⁴⁾。「このようなことの中に悪霊と妖術師たちの作用を含める

21) Jean Bodin, *Paradoxe*, p. 52. ボダンの主意主義的思考を示す重要な文章であり、テントラーもこの部分を引いている。Thomas N. Tentler, *op. cit.*, p. 376.

22) Thomas N. Tentler, *op. cit.*, p. 376.

23) 共通感覚とは、それぞれの感覚を統一的にとらえる根源的な感覚能力のことである。アリストテレスが『靈魂論』において言及した (*De Anima* III 1, 425a14-a30)。

24) ボダンは見聞きした民間のまじないや迷信的慣行を書物から得た知識に重ねてみている。例えば、蠟人形を用いた呪いについてプラトンが『法律』第11巻で記していることに触れた後で、「これらのことを妖術師たちは行っている。ギリシアにいたわけでも、プラトンを讀んだわけでもないのに」と記している。ルネサンスという時代精神が知識人の頭の中に妖術師のイメージを構築するのに大きな影響を及ぼしたことは間違いない。パークはジャンフランチェスコ・ピコの妖術師論を分析した論文において、ルネサンス期には古代の神々の復活と知識魔術の復活が見られたと指摘している。Peter Burke, «Witchcraft and Magic in Renaissance Italy: Gianfrancesco Pico and his Strix», dans Sydney Anglo (éd.) *The Damned Art: Essays in the Literature of Witchcraft*, London, 1977, pp. 32-52.

ことができる。これらは人間の精神と自然の原因を超えている²⁵⁾。すなわち、妖術師と悪霊の行為（妖術）は、アリストテレスの自然学に収まるようなものではなく、超自然なものにとらえられている。このような超自然の現象を起こすことができるのは神とその許しを受けて暗躍する悪霊および善き知らせを授ける天使たちだけであり、超自然の秩序の中ではすべてが可能だと想定されている。悪霊による超自然の現象を否定することは、宗教の基盤である神による奇跡に疑義を抱かせることにつながりうる²⁶⁾。ボダンの立場からすると、妖術はありうるものというより、あつて当然のものなのである。実際、『悪魔的狂気』の序論において、妖術師が存在するかどうか疑うことは、神がいるかどうか疑うのと同じことで、不敬神でさえあるとボダンは言っている。

「共通感覚によって証明されたこと」に反する、すなわち我々の理性で把握できる自然の範疇に納まりきれない現象の存在を是が非でも立証しなければならなかったボダンが、主意主義の立場をとってアリストテレスを批判したのは当然の帰結であったと言えよう。ちなみに、このようなボダンの自然観は魔女狩りに反対していた論敵ヴァイアーのそれと対照的なものである。ヴァイアーは自然を知識で理解できる秩序だった統一体と見なしていたため、自然の中で起こりえない現象に関係する妖術師（魔女）たちの告白を信じる必然性をまったく認めなかったのである²⁷⁾。

ボダンは妖術師を「故意に悪魔的手段によって何らかのことを成し遂げようとする者」と定義していた²⁸⁾。「故意に」という言葉に注目しておきたい。この言葉からは妖術師たちは悪魔に騙されているのではなく、自らの意志で行動を起こしているとボダンが考えていることがわかる。したがって、彼らの犯した宗教的かつ世俗的罪の原因は彼ら自身が問われることになる。妖術師たちの首領である悪魔に罪を着せることはできない。なぜなら、悪魔は神のために働く死刑執行人であり、神の使いであるからだ。

次に 2.1 のテントラーからの引用中の「すべての宗教が蝕まれる」という点に注意しておきたい。社会的道徳（法）の擁護者であるボダンにとつ

25) Jean Bodin, *Démonomanie*, « Préface de l'Auteur », sans pagination.

26) Viochita-Maria Sasu, « Jean Bodin: Hantise du Satanisme », dans Gabriel-André Pérouse, Nicole Dockès-Lallement et Jean-Michel Servet (réunit par), *op. cit.*, p. 440.

27) Ginervra Conti Odorisio, *La famille et l'Etat dans La République de Jean Bodin*, Oristelle Bonis (trad. l'italien par), Paris, 2007, p. 24.

28) Jean Bodin, *Démonomanie*, fol. 1r.

て、無神論は不倶戴天の敵である。「なぜなら、神に対する畏れを失った人間は、法律や統治者などを軽蔑し、一切の不敬虔と邪悪にあふれ、人間の法で改善することなどははや不可能になってしまうからである」²⁹⁾。「サタンの目論みは、手下たちによって神〔キリスト教の〕を侮らせ否定させるだけではなく、悪をなすことに恐れを抱かせておくようなすべての宗教と神と考えられるような存在に対しても同様にそうさせ、完全にサタンの側に向かわせようとする事なのだ」³⁰⁾。すなわち、何らかの宗教という抑えがないと、人間は容易に悪の道に走ることが想定されている。人間は自発的には善へと向かわないどころか悪を選ぶ傾向にあると彼が考えていることをこれらの言葉から読み取ることができるだろう。実際にボダンは美德より悪徳が、善人よりも悪人の方が断然多いと記している³¹⁾。当時、農村から宮廷に至るまであらゆる場所で妖術師が暗躍しているとボダンは察知していた。このような「悪」の蔓延した雰囲気は、人間と悪の癒着がいかに容易になされるかを切実に知らしめていたはずである。

3. 自由な人間をいかに統治するか

3.1 絶対的の一者のもとでの秩序の構築

ボダンの国家論は悪に傾きやすい人間たちの中にいかにして秩序をもたらすかということに主眼を置いて生み出されたものである。少し後の世代のホップズやルソーらと異なり、人間の自然状態や社会契約に関する考察は見られない。ボダンは神と君主をパラレルな関係でとらえ、君主と臣下の支配服従関係を正当化した。

『悪魔的狂気』においては、ボダンの描く神はひたすら厳格に人間と対峙している。罰し報いるとされる神の「罰する」という面がより強調されているのには理由がある。ボダンは現在のフランスの弱体化は宗教戦争が始まったときにアンリ2世が邪悪な者を罰せず、貧しき者を守らなかったことにおいて神の法を破ったことに起因していると考えていた。したがって、神の命令を遵守することは第一義的には先に述べたように神の怒りを避ける、あるいは鎮めることを目的とする。旧約における掟の存在は、神が掟を与える意志的な存在であるということの意味しているとボダンは捉

29) Id., *Les six livres de la République*, Paris, 1986 (réimpression de l'édition de 1593), t. VI, p. 23.

30) Jean Bodin, *Démonomanie*, fol. 270r.

31) Id., *République*, t. V, p. 97.

え、これを当時のフランスにおいても復活させようとする³²⁾。その目論みは彼が最善の政体だとみなした君主制を正当化するためにも欠かせないものだった。

国家における君主は全宇宙における神のアナロジーとして描かれることにより、その統治は正当化される。そして、自由意志によって世界を統治する神と同様に君主もまた自由意志に基づく統治者となる。したがって、君主の意志次第で国家はよく営まれることも悪しき状態に陥ることもある。ボダンが国家の定義においてそれが善に向けられたものだと明記しなかった理由もそこにあるのかもしれない。善を目指すことよりも秩序維持が最大の目的であったことは、「暴君でも主権者である」、「最も激しい僭主制であっても無秩序よりは悲惨ではない」というボダンの言葉が示すとおりである。

ピラミッドの頂点にただ一人君臨する君主の姿は一者のイメージに由来する。「一者」の思想的背景には、ピタゴラス主義、グノーシス主義、とりわけ新プラトン主義がある。また、そこに神の絶対的権威と唯一性を強調した中世の神学（主意主義）も大きな影響を与えている³³⁾。秩序の構築の際のモデルとしてボダンは一者としての神のイメージを全世界の被造物のうちにも見出す。例えば、さまざまな石のあいだではダイヤモンドが君臨し、諸々の惑星を太陽が支配し、家の中では家長が権威をもつ。この唯一なる者のイメージは国家においては君主に投影された。また、神のもつ権限がそうであるように、王のもつ主権も唯一不可分であるとされた。神の世界支配のアナロジーとしてこの世の統治を考えると必然的に君主制が選択される³⁴⁾。

とはいえ、ボダンは形而上学的な観点からのみ君主制を推奨したわけではない。彼は、貴族制と民主制がもたらす弊害を歴史から十分に学んだ上で、君主制がより安全かつ有効で長続きする国制であり、中でも近親の男性に世襲される世襲王制が最も望ましいとの結論に至った³⁵⁾。王に付与さ

32) ユダヤ主義的な法や規範については『普遍法』（1578年）の時点では語られておらず、神の復讐については触れられているものの主要なテーマではなかったとバクスターは言う。Christopher Baxter, «Jean Bodin's Daemon and his Conversion to Judaism», dans Horst Denzer (éd.), *Actes du Colloque international Jean Bodin*, Munich, 1973, pp. 1-21.

33) Michel Villey, «La Justice Harmonique selon Bodin», dans Horst Denzer (éd.), *ibid.*, p. 79.

34) Jean Bodin, *Methodus*, pp. 215-216.

35) Id., *République*, pp. 18-19. ボダンは『歴史方法論』（1566年）の時点では穏健君

れた絶対的な権力である主権は法律の拘束を受けず、主権者の命令および意志が法律となる。国民に対する王の権力は家における家長の権力と同様に一方的な命令となり、命令される側からの抵抗権は認められない。主権者である国王は当然のこととして神の支配下にあり、神法と自然法その他の拘束を受けるとされる。もし王が悪に陥った場合は神による罰が下るのだが、ボダンにおいて主権はアプリアリに完全なものとして想定されている³⁶⁾。王はこの世において神の写しであり、政体の中で神の正義を実現することがその使命とされるからである。国王の主権のもとで正しく国家が治められるためには「報いと罰」が的確に与えられることが必要であり、これを実質的に執行するのは裁判官をはじめとした役人に他ならない。ボダンが『悪魔的狂気』において妖術師への処罰を説く第一の理由は「全体への神の怒りを避けるため」であり、「国家という統一体にとって妖術師を探して処罰することはためになる」からである。国家による妖術師狩りからは、政治的あるいは現実的な効果および宗教的な効果が期待される。

キリスト教の伝統の中では二元論は糾弾されていたものの、神と悪魔、天の国と地の国の対立は前提とされていた。想定される2つの対立物は、その片方を知ることによりもう片方の特性がより明らかとなる。神と悪魔というペアにおいては、悪魔の不正、邪悪さに注目し、それらを強調することにより、神の正義と善性がさらに際立つ。近年の魔女狩りの思想史研究をリードしてきたクラークが指摘するように³⁷⁾、ジェームズ6世（スコ

主政論を展開していたが、『国家論』（1576年）では絶対君主政論へと立場を変えた。これは宗教戦争が激しさを増していく中で、権力を集中させることにより国家の滅亡を回避しようとしたためであると考えられる。清末はこの「立場の転換はむしろ宗教戦争に対する危機意識の中で、あるいは宗教的高揚の中で、『歴史方法論』では分離・併存していた国家論が宇宙論と結合し、国家が神の支配する宇宙に従属した有機体という存在論的規定を大前提としたものになったことによる」と述べる。清末尊大『ジャン・ボダンと危機時代のフランス』木鐸社、1990年、p.185。

36) 主権が絶対であるという認識においてはボダンもホブズも同じであるが、ホブズにおいて主権は必ずしも王の姿と結びついてはいない。また、ホブズにとって英国王は多数の君主のうちの一にすぎないのに対して、ボダンにとってフランス国王は唯一絶対の君主である。ホブズは新しい秩序を、ボダンは古い秩序を求めたとベルシーは述べる。Germano Bellussi, «L'absolutisme politique et la tolerance religieuse dans l'œuvre de Jean Bodin et de Thomas Hobbes», dans *Jean Bodin. Actes du Colloque interdisciplinaire d'Angers*, 2 vols., t. I, Angers, 1985, pp. 43-47.

37) 以下の議論はクラークに多くを負っている。Stuart Clark, «King James's Daemonologie: Witchcraft and Kingship», dans Sydney Anglo (éd.), *op. cit.*, pp. 156-181. Stuart Clark, «Inversion, Misrule and the Meaning of Witchcraft», *Past and Present*, no. 87,

ットランド王、1567-1625年、のちにジェームズ1世としてイングランド王)はこの理論を援用して自らの統治を正当化していた。彼が妖術師狩りに介入し悪魔学の著作を残した理由は、神と悪魔、および神の地上における代理人である国王と悪魔の手先である妖術師という対立項を設定し、その類比によって自らの統治の正当性を証明して秩序を構築しようとしたためである。自らを神の道具であると考えたジェームズ6世は、政治的な要求と宗教的な要求の双方を満たすために妖術師狩りに関与したと言える³⁸⁾。このモデルはボダンのデモノロジーおよび政治学にも適応できる。秩序の擁護者であるボダンは、望ましい社会秩序の正反対にあるものとして妖術師たちの世界を凝視する。これは、サバトにおけるさかさまの儀礼や近親相姦も含む乱交などに端的に表象される。そこに集う妖術師たちは自らの意志で悪魔と結託した反逆者である。無秩序と背徳の支配する悪魔と妖術師の世界は、正しく運営された家々から構成され一人の君主によって統治されるべきこの世の秩序を構築する際に、ボダンによってアンチテーゼとして用いられたのである。

3.2 悪を減らすために——国家による統制と寛容

人間が悪の道に走ることを阻止するためには、何らかのブレーキが必要である。ボダンはこれを宗教に求める。ボダンは宗教が「君主や領主の権力、法の執行、臣下の服従、裁判官への畏敬、悪をなすことへの恐れ、人々の相互友愛の基盤である」³⁹⁾と記した。

ボダンの理想は「一つの何らかの宗教」のもとで国家が統治されることである。国家において宗教が一つであることが望ましいとする見解は、『公教育に関する言説』（1559年）においても現れている。ボダンはこの著作の中で、若者がきちんとした教育を受けてこそ国家が繁栄できる、そしてその教育は私学ではなく公教育によって担われるべきだと説く⁴⁰⁾。国家にとっての悪は青少年時に受ける教育の多様性に起因するとボダンは言

1980, pp. 98-127. ジェームズの悪魔学には独創性や深みはないが、君主によって書かれた唯一の悪魔学に関する著作であるという点に付加的意義と重要性がある。

38) *Ibid.*, p. 164.

39) Jean Bodin, *République*, t. IV, p. 206.

40) Id., *Le discours au sénat et au peuple de Toulouse sur l'éducation à donner aux jeunes gens dans la république*, dans Pierre Mesnard (trad.), *Œuvres philosophiques de Jean Bodin*, t. 1, Paris, 1951, pp. 31-65 (*Oratio de instituenda in Republica iuventute ad senatum populumque Tolosatam*, 1559), p. 34.

い、私学では教える宗教が多様であるから、そこから不和や戦争が起こると考えた。とはいえ、現実にはこの公的な宗教（カトリック）とは異なった宗教、あるいは宗派（プロテスタント）の下で生きている者たちが存在する。その場合にどうするべきか。ボダンは、弱体な宗派を多数派が潰すことも追放することも容認しているが、多様な宗派が乱立する状況では、力による宗教的統一は退けられている。「なぜなら、人間の意志は強制されればされるほどますます強情になるからである」⁴¹⁾。

そこで、彼はより実現可能な宗教政策として宗教的多元主義⁴²⁾を勧める。アリウス派に対し正統信仰を強制し処罰するようなことをせず彼らを容認した大テオドシウス帝や、ヨーロッパの広範囲を支配しながらも、いかなる者にも宗教を強制しないどころかその者たち自身の良心に従って生きることを許していたトルコの王、さらにアリウス派でありながら臣下にそれを強制することのなかった東ゴート王テオドリックをボダンはモデルとして挙げている⁴³⁾。

同時に、多様な現状を認めるという手段によるのだけではなく、国家が積極的に臣民のモラルを統制する必要もボダンは感じていた。このことは、監察官（サンスクール）制度を復活すべしという彼の主張によく表れている。census（監察）の意味するのは「各人の biens の評価に他ならない」⁴⁴⁾とボダンは言う。監察官の評価する les biens（財）のうちの1つは、臣民の財産や人口、年齢、身分、職業などであり、もう1つは、信仰や教育（とくに若者の）や習俗に関する善であると言える。ここでは後者の機能にのみ言及しておきたい。

本来は家が担う役割であるこれらのモラル的な統制を監察官に委ねるべきだとしたのは、ボダンは家父長権の衰退を痛感していたためである⁴⁵⁾。この職務を担うべきだとされたのは、教会と聖職者たちである。具体的な活動の例としては、法によっては取り締まることができない背信行為や習俗を墮落させる劇場の統制や廃止の他に、暴飲、賭け事、淫蕩の取締、善

41) Id., *République*, t. IV, p. 206.

42) 宗教だけではなく、法や慣習に関しても臣民たちが2つの意見に分かれるのが最も危険だとボダンは言う。2つ以上に分かれていれば、ある者たちは平和を仲介した別の者たちはそれに同調することによって調和が生まれるが、2つの対立する者同士では調和は生まれない。Id., *République*, t. IV, p. 208.

43) *Ibid.*, t. IV, pp. 206-207.

44) *Ibid.*, t. VI, p. 7.

45) *Ibid.*, t. VI, p. 23.

き臣民にとって有害な浮浪者や怠惰な者を追放することが挙げられている⁴⁶⁾。監察官を用いれば徳が栄え国家は永続するが、彼らが捨てられるならば法と徳と宗教が軽蔑されるだろうとボダン述べている⁴⁷⁾。

国家の安定にとって宗教は不可欠だと考えていたボダンは、聖職者である監察官たちの力を利用しようとする。それと同時に、ボダンは彼らが権力をもつことを警戒し、具体的な懲罰を与える権利を与えなかった。この事例からも明らかなように、ボダンにとって聖職者たち（教会）は国家の中に存在し、その手先として役立つべき存在である。『国家論』においては、宗教団体は各種の職能団体や都市や地方の地域団体と同様に主権の下にあり、諸団体の長はその団体かあるいは主権者が任命すると記されている⁴⁸⁾。宗教団体のひとつであるため、カトリック教会にもおのずとこの規則が適用される。すなわち、フランスではカトリック教会の長は教会組織、あるいは国王のいずれかが任命すべきだとボダンは考えていたのである。ここには宗教を国家が統制下におこうとするガリカニズムの特徴が顕著に表れている。ボダンの描く国家の頂点には君主という主権者がおり、君主（国王）は上位者としては神しかもたない。当然このようなボダンの理論は、教皇の忠実な僕であった国内のイエズス会士たちにとって許しがたいものであったに違いない。ボダンは晩年に魔術関係の禁書所持の疑いをかけられ、イエズス会士により家宅捜索を受けたことがある。この背景には、ボダンのガリカニ的傾向に対するイエズス会士たちの憎悪もあったのではないかと推測される。

ボダンにとって公の宗教や聖職者は社会維持のための装置であったと言える。そのような彼にとって「真の宗教」とはいかなるものであったか。この点に関してはいずれ稿を改めて論じることにはしたが、きわめて個人的な、かつ内面に根ざした自らの信仰のみに存するものであったということだけは確かである。ボダンは、真の宗教について以下のように述べている。「これ〔世俗的あるいは公的宗教〕に対して純化された魂の神への回帰に他ならない宗教それ自身は、政治学も集会をも必要とせず、一人の人間の孤独の中に存在しうる」⁴⁹⁾。

46) *Ibid.*, t. VI, pp. 22-23.

47) *Ibid.*, t. VI, p. 33.

48) *Ibid.*, t. III, p. 180.

49) *Id.*, *Methodus*, p. 27.

おわりに

ボダンにおける主意主義は以下の三点に発現していた。①人間を理解する際に、「知性」ではなく「意志」を中心的な存在としてとらえている、②神の世界統治は「意志」によりおこなわれている、③君主もまた社会を「意志」により統治すべきである。そしてこれら三点はボダンにおいて区別されつつも、連動してとらえられていた。

意志的存在である人間は、自らの意志的な決断に基づいて、限りなく善い存在になることもできれば、悪魔と結託するというような限りなく悪しき選択を為すこともできる。そして、現実として多くの人間は悪を選び取ってしまっている。このような人間たちによって織りなされる人間社会に秩序を与えるためには、主権者の意志の強力な発動が必要とされるとボダンは捉えた。主権者は神と類比的な関係にあり、神はその意志により世界統治をおこなっている。人間を徹底的に意志的存在として捉えるボダンの主意主義的な発想が、「近代的」な「主権論」と「中世的」な「妖術師論」双方の基盤にあり、その結節点となっているのである。

ボダンは自由意志により悪を選択しやすい人間たちを統治するために強力な国家についての理論を産み落とした。絶対的権力を備えた国家は、ときに最強の悪となる。我々はその事例を歴史の中に多々見出すことができる。また、現代においても国民の人権を剥奪し、彼らを過酷で悲惨な状況に追い込んでいる悪しき国家は存在する。ボダンの主意主義や近代性について考えることは、今日の問題とも根深いところがかかわりがあると言えよう。